

る病院サイコロジストの方々の積極的な協力を得ながら、土川・池田両君との共同研究として、具体的な症例の分析から検討をすすめている。現段階での暫定的な成果は、中間報告として、これも55年5月の東海心理学会第29回大会で、「名大式技法における〈思考一言語カテゴリー〉の再検討（第1報）」として、6名の共同研究者が報告を行った。幸にして今年55年度もひきつづき、科学研究費の援助が得られているので、これらの資料をもとに、具体的にカテゴリー再構成の仕事をさらに強力におすすめていきたいと考える。

7) 私にとって、今ひとつの臨床活動の柱は学生相談室における実践である。昨年の京都における会議をうけつづき、第13回全国学生相談研究会議を、この55年1月7日から8日まで定光寺の愛知県労働者研修センターにおいて、名古屋大学が当番校として開催をひきうけることになった。共通一次元年ともよばれる昨年度の新入生が、大学という状況の中で、どのような問題を新しく課せられることになるのか、それをメイン・テーマとして、今度も、学生相談活動の中での症例検討を中心に、熱心

な討議が合宿形体でもたれ、多くの成果を得たように思われる。

8) この活動の中で最近特に大切にしたいと思っているのは、学生を対象としての、また教官同志による、エンカウンターグループの実践である。54年度も10月13日から17日まで鳥羽菅島において、名古屋大学学生を対象とするグループを、厚生補導特別企画の援助にもとづいて実施して、その意義をいよいよ実感することができたし、また教官エンカウンターは、54年度の河口湖グループにひきつづき、今年もまた7月20日から22日まで箱根での集まりで、改めて仲間同志との出会いをもつことができた。これらの成果は今秋刊行される予定の、佐治、福井両氏と私との共編になる、誠信書房刊「グループアプローチ 2」に、前者は「名大グループ3年間の成果」として、田畑、土川、伊藤、渡辺四君との共同執筆で、また後者は「教官エンカウンター・グループ座談会」の中でふれられている。今後もうこうした体験をとおして、常に新たな自己との対決を深めていきたいと考える。

(昭和55年8月14日)

研究経過報告——'79年秋～'80年夏——

小 嶋 秀 夫

〔児童発達研究における歴史的視点〕この領域での自分の考えは少しずつ進歩していると信じてはいるが、外に大した成果が現われた訳ではない。ただ、ここ3年ほどの仕事の結果を2つにまとめ、今後の1ステップとした。1つは、日本心理学会第44回大会での小講演「児童発達研究における1つの歴史的視点」(札幌, 8月)で、もう1つは本学部の特定研究の成果をまとめた2冊本の1つに載る「児童観研究序説——児童観研究の意義と方法——」である。

未知の領域に素人として乗り出すと、初期のうちは割とrewardを多く受ける。何しろ、自分の頭の中に取り入れるべき情報はいくらでもあるから。また、学問的意義はいざ知らず、個人的には大いなる「発見の喜び」を経験することもできる。昨年の暮に京大の医学図書館の富士川文庫で、3年間自分で探し、何人もの人に聞き、日中の医学史の本を調べ、人を介して外国で探してもらっても見付らなかつた元代の本の該当箇所を遂に「発見」した。これには、探し方についての景嘉氏(東京)の示唆が大きな助けとなった。

〔社会化研究〕昨年11月にサンフランシスコで開かれた日米比較社会化研究のPlanning Meeting(日本側代表: 三宅和夫氏・北大)に参加し、広義の社会化研究に関す

る2つのpresentationを行なった。1つは波多野詠余夫氏と共同の認知的課題の解決様式に関するものであり、もう1つは日本の子どもの行動基準の獲得過程(いわゆる、ホンネ・タテマエの問題)に関するものである。

これとは別に、BerkeleyのBlock夫妻と、小規模な比較社会化研究を計画していて、往來があった。

〔児童研究の倫理〕筆者の問題提起(児童心理学の進歩, 1975・1979年)に漸く少しの反響が出てきたと思われる。日本教育心理学会第22回総会準備委員会(東大)の依頼により、これに関するシンポジウムを企画し、現在、準備的討論を3名の方と進めている。

〔発達研究について〕この基礎となるべき発達の概念化、次元化とその測定尺度の構成についての若干の考えは、日本教育心理学会第21回総会の発達部門の発表のレビュー(教育心理学年報, 1980)と、日本心理学会第44回大会のパネル・ディスカッション「発達心理学の研究はいかにあるべきか」で述べられた。後者は、Wohlwill, J. F. (1973)の影響を強く受けている。学会発表の在り方についての筆者の提言(教育心理学年報, 1980)は幸いにも一部受け容れられ、上述の教育心理学会総会(東京, 10月)で試行されることになった。

〔認知様式〕研究論文は出せなかつた。いま、場依存性

(Witkinは昨年亡くなった)に関して、院生の河合・鋤柄両君と、大学生の少し長期にわたったデータを取りつつある。また、認知的衝動性一熟慮性のプロセスモデル

を提案するため、院生の宮川君を援助している(日本心理学会第44回大会で発表)。

研究経過報告 — 昭和53, 54年度 —

田 畑 治

1. 個人研究の主要なテーマ「心理治療関係による人格適応過程の研究」に一段落をつけたところで、丁度時計の振子が右の極から左の極にうつるように、ここ2年間は、個人心理療法ならびにカウンセリングの研究は、以下のような方向ですすめることができた。

一つは、カウンセリング過程の諸現象に関するもので前年度から、カウンセリング研究会で取り組んできていたものを、学会発表にもっていくことができた。問題の所在とその具体例(東海心理学会, 53.5), クライエントの質問とカウンセラーの受けとめ(日心, 53.10), クライエントKにおける沈黙の内的意味(東海心理学会, 54.6)の一連の研究を、伊藤義美と共同ですすめることができた。

もう一つは、「体験過程療法」で著名なシカゴ大学のGendlin博士が九州大学での日本心理学会に招かれて来日し、特別講演をしたり、その後「フォーカシング技法」(焦点づけとよばれる)のワークショップが津屋崎海岸で2泊3日間の日程で開かれ、これにも参加し、ちかに体験することができた。その後も名古屋で月例会のかたちで、そのワークショップに参加した仲間有志と「フォーカシング技法」の検討会を重ねてきた。そして「フォーカシング技法」を一方で深めながら、カウンセリング過程に適用した例を発表することができるところまでこぎつけたことである。これらの成果は、日本相談学会(54.5), 東海相談学会(55.3)にその一部を発表した。この技法は、まだまだ未知の部分があり、今後一層研究を継続しなければならないと思われる。なお学部の特講義でも「体験過程療法」をとりあげ、「身体感覚」になじむことの必要性を学生とともに学ぶことができた。

さらに、従来からの継続として「心理治療関係における治療的要因」の意味づけについて、東海相談学会7月例会(53.7)で話題提供し、反響をよんだと考えている。また、カウンセリング研究会有志により、「ミニ・試行カウンセリングの実験的研究」を行った。これは、カウンセリング学習の基礎訓練として、重要な意義をもつものと考えているが、データは目下検討中である。

この他、ケース研究のコメント〔鳴澤論文へのコメント〕「問題化・湯治場の湯・自分との再会」(臨床心理ケ

ス研究2, 誠信書房, 54.8), 水島恵一・岡堂哲雄と筆者の共編で『カウンセリングを学ぶ』(有斐閣, 53.11)をまとめることができた。特に、ケース研究のコメントは、他人の取り組んだケースを自己の臨床的取り組みと照合でき、とても参考になることを記しておきたい。

2. 心理臨床家の養成、教育・訓練に関する問題。大学院臨床心理学専攻コースをもつ本学部として、この問題は避けて通れない問題である。すでに数年前から、京大、広大、九大の三大学大学院臨床心理学研究会が発足し、ここに参加するメンバーは、相当の実力やウデを上げてきていると考えられる。専門の『研究紀要』を発刊し、その内容の水準からしても、そのように考えざるを得ない。本学がその水準に追いつき、追い越すには相当の努力が必要と思われるし、実力やウデを上げるための“スーパーヴィジョン”体制を抜本的に考えなおさなければならぬと思われる。

幸い、日本心理学会(九大, 53.10)のシンポジウム「心理臨床家の資格問題をどうするか」で大学の立場より発題する機会に恵まれたが、心理臨床領域の多様性、アンデンティティの混乱などがあり、問題は山積しているように思われる。資格の国家認定か団体認定かも不明確なままである。今後より一層検討すべきことを認識した。

もう一つこの問題で特筆すべきは、「昭和54年度心理臨床家の集い」が名大教育学部を会場として開催され、参会者から好評を得たことである。53.10の九大での日本心理学会大会期間中にもたれた「心理臨床の夕べ」に集った80余名が母体となり、村上英治教授、空井健三中京大教授と筆者の3名が、昭和54年度の「集い」の発起準備人として携わり、東海地区の心理臨床家や教室のスタッフの応援を得て、症例の相互研修会やシンポジウムをもつことができた。これは次年度、関東地区で継続して展開されていくはずである。心理臨床に関する全国規模の会合がとだえて久しかっただけに、若い情熱とエネルギーがほとばしった「集い」であったといえよう。

3. 教育臨床に関する研究。学校教育相談、学校カウンセリングを通して、教職現場の人びとと接触する機会は年に4~5回あったが、主題を深めるところまで至ら